

コレヒドール要塞慰霊訪問記

2011年11月12日～15日フィリピン・マニラのマカティ市でAPAAの59回理事会が開かれた。この機会にコレヒドール要塞を訪問したいとアコンパニーパーソンプログラムのコレヒドールツアーを申し込んだが、満員というので、やむを得ずホテルに頼んでプライベートツアーを申し込んだ。ホテルからの送迎を含め昼食付きで98ドルと格安であったので、15日このツアーに参加した。

5時半に起きて支度をし、ホテルで早い朝食をとり、集合時間の6時半ぎりぎりにホテルの玄関に集合した。会議に出席した外人4名と共に、迎えのボックスカーに乗せられて港に向かった。先ず、受付所で切符を購入、少し離れた波止場の待合室で身体検査の後、約1時間待たされた。そこには各所から集められた乗客が約100名集合していた。8時出発の予定が、8時から乗船開始、30分ほど遅れてやっと出航した。



日本製の高速艇

船は200人乗りの高速船、当日は生憎の雨、時々強く吹き付ける雨で窓は曇り、

外の景色がよく見えない。コレヒドール島はマニラ湾の入り口に横たわるオタマジャクシの様な形をした島である。

この島では大戦中2回にわたって日米両軍による死闘が繰り返された。最初は、大東亜戦争勃発直後、日本軍が比島に上陸し、バターン半島の米軍を駆逐し、1941年4月14日コレヒドール要塞を攻撃し始めた。本間中将の率いる日本軍の空陸からの攻撃により5月7日、米軍のウェンライト中将は降伏を申し入れた。この要塞に立てこもった米比軍は12000名、そのほとんどが捕虜として投降した。総司令官マッカーサーは既にオーストラリアに逃亡していた。

第2回目は米軍の反攻時で、当時コレヒドールに立て籠もっていた日本軍は、艦船を失った海軍の陸上部隊3000名と陸軍1500名であった。1945年1月22日より米軍は攻撃を開始、空からの猛爆と陸、パラシュート部隊の攻撃により日本軍は壕に立て籠もり専ら夜襲によって反撃したが、後述のトンネル爆破作戦の失敗により大半の兵力を失い、マニラ守備隊の壊滅した3月に島を脱出できたものは僅かに300名と云われている。誠に痛ましい限りである。

高速艇は1時間15分経った9時45分に小さな港に着いた。

港では、街で多く見られるジブニーと呼ばれるバスを大きくしたような観光バスが8台待機していた。

言語別に分けられたが私は数人の外人と行動を共にしていたので止むを得ず「English」の車に乗せられた。まず最初に

ガイドさんが同行者約20名に対して出身地を聞く。殆どが欧州、米国、オーストラリアである。ガイドさんが日本人はいませんねと言うと3人の若いアメリカ人がハイと手を挙げ周囲を笑わせる。バスの後部座席にいた私がおそろおそろ手を挙げると、ガイドさんは『今日は日本人の悪口は言えないね』とふざけて言う。



観光バス

バスが走り出すや否や、ものすごい大きな声で早口でガイドさんの説明が途切れることなく続く。半分は聞き取れないが、周囲の景色からほぼ想像がつく。

まず、日本平和公園の横を通り過ぎる。遥かに慈母観音像と慰霊塔が見られた。上り坂の崖に横穴が2か所見られた。これは水上特攻隊「震洋」の基地の入口とのこと。震洋特攻隊は昭和20年2月16日出撃、染谷基地員の手記によれば巡洋艦1隻、大型輸送船数隻を撃沈した。その後は30隻程出撃しているが、敵艦は周囲に筏を組み、震洋艇の侵攻を妨げたので殆ど成果が得られなかった模様である。

次にバスはマッカーサーの銅像のある広場で停車。雨も上がり、外に出て銅像を見上げる。いかにも誇らしげにパイプを左手

に右手を挙げている。そもそもコレヒドール島は、スペイン統治時代、1850年代に10インチの大砲を3門備え付けて要塞化したが、1898年の米—スペイン戦争で米軍に占領され、爾後、フィリピンは米国の統治時代に入った。1903年工兵少尉に任官したマッカーサーはマニラに赴任し、最初の仕事としてマニラ湾の港湾改良、コレヒドール島の要塞構築、バターン半島の横断道路の建設に取り組んだ。1908年コレヒドール島に米軍の常備軍が置かれ、以後本格的な要塞が構築された。日本軍が侵攻した後、マッカーサーはフィリピンのケソン大統領と共にコレヒドールに立て籠もっていた。また、米軍反攻時には自らの手でコレヒドールを攻撃することになった。このようにコレヒドールはマッカーサーにとっては非常に因縁の深い島と云える。

次に、バスは日本人による慰霊碑のある広場で止まった。ここには、和歌山歩兵第六十一聯隊戦友会の建てた「鎮魂」の碑文の慰霊碑があり、日米両国語でその謂われが刻まれていた。



和歌山歩兵第61聯隊の慰霊碑

次の停車は「コレヒドール戦没者慰霊之碑」の前であった。その後方に高射砲と思われる

る大砲が4門空の方を睨んでいた。砲座には微かに2910と数字が読み取れた。

後で調べたところによれば、これは海軍の四五口径十年式十二糎高角砲で、重巡や航空母艦に搭載されていたが地上砲としても使用され、マニラ海軍防衛隊の31特別根拠地隊としてコレヒドールに配置されていた。



海軍の高角砲と筆者

次に土産物店の前で止まる。日本軍が占領した時の写真やマリントネルの写真等が売られていた。多数のペソ紙幣が展示されていたので、「これは何か」と尋ねると、店員は「日本のお金だ」という。よく見ると紙幣の上の方に「THE JAPANESE GOVERNMENT」下の方に「府政國帝本日本」と記載されている。当時の軍票である。

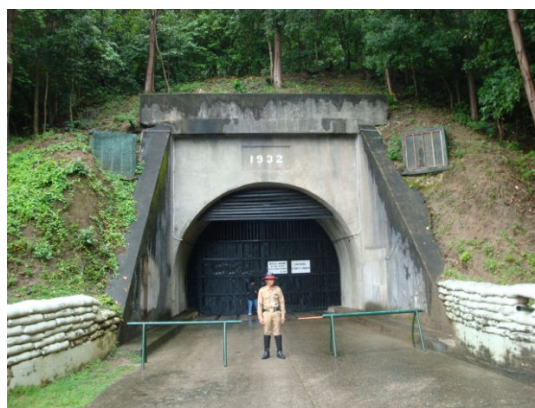


フィリピンで使用された軍票

「それをくれ」というと100ペソから1セントまであった十種類の壁に貼ってあつ

た紙幣を全部剥ぎ取り1000ペソ（約1500円）でいいという。記念のために全部買い取った。

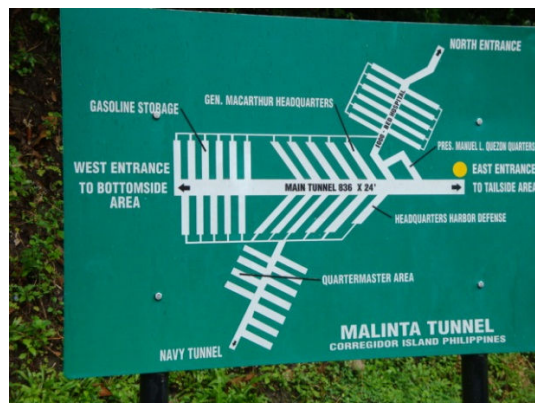
次にバスはマリントネルの前に停まった。



マリントネルの入り口

このトンネルは長さ25m、幅7mの巨大なトンネルで24の横穴を持っている。中にはトロッコの線路や発電所、病院等の施設まで備えていた。

数台のバスの乗客約50名が1グループとして真っ暗なトンネル内に誘導される。白いラインのところで止められるとライトがともしガイドの説明が始まる。



マリントネルの構造図



トンネルの横穴に作られた医務室

50m毎に止められると横穴には、日本軍が侵攻してから、米軍の反攻を受け敗退するまでの話が、ジオラマ、ビデオ、音響、光線を使って再現されてゆく。前半は日本軍が侵攻してコレヒドール要塞を制覇し、トンネル内で、本間中将と米軍ウェーライト中将との間で米軍の降伏調印式が行われた模様が再現されている。



本間中将と米軍ウェーライト中将とで行われた米軍の降伏調印式

しかし、その後の米軍の反攻でコレヒドール要塞は再び米軍の手に落ち、最後は、大爆音のもとに日本兵は絶滅する。これは、トンネルの天井をくりぬいて爆薬を装填し、トンネルの上にある地上の米軍部隊を爆破する日本軍の計画で実行されたもので、地上の米軍1部隊を生き埋めにしたが、その

逆風でトンネル内の総攻撃の体勢にあった日本軍約3000名が爆死したとのことである（野中海軍上等兵談話）。

昼食は島で唯一のホテルのコレヒドール・インでバイキングをいただく。スパゲッティやチャーハンにフライドチキンがついたもので、結構美味しかった。

昼食後は大砲群を見て回る。島の西南部には最大の砲台スミスやハーン（口径12インチ、射距離2900ヤード）他6門の長距離砲があったが、いずれも外洋に向けられた固定式の砲であったので日本軍の攻撃に対しては全く役に立たなかった。最も強力な攻撃力を発揮したのは、ウェイ、ギャリーの曲射砲（口径12インチ）計12門であった。



最大の長距離砲ハーン砲台



ウェイ砲台の巨大な曲射砲群

その他大小合わせて約50門の大砲が備え付けてあった。これらの大砲は米軍反攻時には米軍の徹底した空爆によって殆ど威力を発揮することなく米軍の上陸を許してしまった。



兵舎の残骸

バスの通路の横には、コンクリート製の横に細長い巨大な米軍兵舎の残骸が続いていた。いずれも骨組みのみが無残に残されていた。

途中トップサイドのジャングルの中に星条旗の翻る国旗掲揚塔が望見された。1942年5月6日には日章旗が掲揚されたが、約3年後の1945年2月22日再び星条旗にとって代わられた。

最後に太平洋戦争記念館を訪れた。真っ白なドームの中の博物館には日米軍の遺品が展示されていた。日本の展示品には軍刀、軍帽、ピストル、水筒や千人針の腹巻が展示されていた。

コレヒドール棧橋の出航は14:30、マニラ港には15:45に到着した。島の滞在時間約5時間、ガイドさんの早口の

大音量の途切れることない説明にほとんど頭が疲れ、バスの進行順序や見聞した記憶にはっきりしない部分があるが、万一間違えがあればご容赦お願いしたい。

ところで、マニラ滞在中に特に印象に残ったことをいくつかお話ししたい。

まず、フィリピン人は温和で人なつこく、滞在中一度も嫌な思をしたことはない。コレヒドールでも日本の記念碑等がよく管理され、日米戦闘の様態も比較的公平に表示されまた説明されている。気温は30度前後、一寸暑い、ホテルや乗り物の中は冷房が効いて寒い位。食べ物もおいしく、買い物をして無理に押し付けることもない。

マニラ市街は高層ビル群があちらこちらに聳えたち、その合間にトタン屋根のバラックの家が密集している。



地方都市の三輪車の大群

道路には車が溢れ、裏道の十字路では信号がないので、四方から突っ込んでくる車が一寸刻みに人を掻分けながら進んでゆく。それでもあまりクラクションは鳴らさない。町の交通機関はもっぱらタクシーとジプニーという日本製のエンジンに手作りのボデーを付けた小型バス。地方に行けばジプニ

一の他に三輪車の幌付きバイク。これがイナゴの大群のように走りまわっている。

しかし、セキュリティの厳重なことには驚いた。空港でのボディチェックは当然だが靴まで脱がされた。ホテル、ショッピングモールの入り口では必ず、ガードマンがいて金属探知機で入場者をチェックする。

ホテルでは入口は正面玄関のみ、麻薬犬まで出迎えてくれる。ホテルでまごついたことは、エレベータが部屋のカードを挿入しなければ動かない。私の泊まったペニンシュラホテルは左右に塔があるので、別の塔のエレベータに乗ってカードを挿入しても動かない。カードがないと部屋に帰れない。

町角にはいたるところに警官が立っている。しかもこの警官はミリタリーポリスで自動小銃を肩に掛けて警戒している。然しこの兵隊さんは意外にやさしく道を聞くと丁寧に教えてくれ、一緒に記念写真をお願いすると笑顔で応えてくれるところがフィリピンの的である。

2011年11月25日記

川島 順 (APAA 会員)

はやぶさ国際特許事務所

